

### 俳句に於ける寫生（Ⅲ）

山口青邨

ずっと後のことである、虚子は寫生といふことに就てこんなことを言っている。

「私は多年、寫生といふことを強調してゐます、寫生といふ上には無論客觀の二字を冠すべきであります、これは客觀寫生の技をゆるがせにすべからざることを痛感してのことであるます、繰り返して申しますが、寫生の技であります、思想の方面は一切拘束しないのであります、如何なる感じを以て自我一に對しようが、その點は全く無拘束であります、或者は冷やかな感じを以て自然に對する、或る者は暗い情を以て自然に對する、或る者は樂しんで自炊一に對する、或る者は悲しんで自然に對する、或る者は肯定の目を以て人生に對する、或る者は懷疑の目を以て人生に對する、或る者は親愛の情を以て人生に對する、或る者は嫌惡の哲を以て人生に對する、或る者は怪力亂神を説き、或る者は凡庸の生活を描く、すべてそれらは拘束しないのであります、ただ寫生の技を重視るのであります。」